予期せぬ発見！ 田布施町下小田古墳

「ほっとやまはく」タイム㊸

やまはく×埋文センター

発掘調査の仕事をしていると、時に、全く予期していなかった発見に遭遇することがあります。2018年度に発掘調査を実施した田布施町下小田（しもこだ）遺跡もその一つです。

下小田遺跡は、調査面積が5048平方㍍に及び、同町の教育委員会が実施した試掘の結果、集落跡が発見されるものと期待していました。果たして、平安時代の掘立柱建物や遺物を発見しましたが、予想外だったのは、長方形の石の囲いを発見したことです。石囲いは、遺跡の表面の土を重機で取り除く際に偶然見つかりました。それは、南北方向に長く、南側短辺を除く三辺で、大きな板石を立てた状態で埋まっていたことから、直感的に、南側に入り口をもつ古墳時代の横穴式石室で、壁や天井が破壊されたものではないかと判断しました。

ところが、石囲い内部に埋められた土と礫（れき）を慎重に掘り込んでいくと、平安時代後期の土師（はじ）器杯や椀（わん）、皿約20点がまとまって出土し、さらにその付近から人骨と思われる四肢骨3点と、木炭が散乱した状態で出土しました。骨の1点は成人男性の大腿（だいたい）骨でした。「見込み違いか……」と一瞬思いましたが、土と礫の合間から、須恵器がのぞいているのを見逃しませんでした。期待を膨らませて、掘り込みを続けると、ついに多くの須恵器や鉄製品がまとまった状態で顔を出し、古墳時代の横穴式石室であることが判明したのです。

石室は、やはり下部の方しか残存せず、その規模は、残存する長さが5・2㍍、最大幅が2・08㍍を測り、床面積にして10・8平方㍍ありました。これは、調査面積全体の0・2％程度にすぎないことからすれば、試掘で見つからなかったのも無理からぬ話かもしれません。また、石室を中心に周囲を見渡すと、円弧状の浅いくぼみが部分的に見られ、これを古墳の周溝とみなせば、墳丘規模が約10・8㍍の円墳であったと推定できます。出土した須恵器から、6世紀末～7世紀初頭に築かれ、7世紀後半まで追葬（ついそう）を行ったと考えられます。その後、この古墳は、新たに「下小田古墳」と命名されました。

石室内の遺物出土状況

発見した石室

さらに予期せぬものが

豊富な副葬品

下小田古墳では豊富な副葬品が良好な状態で出土しました。発見された副葬品には、縁金具や鞘尻（さやじり）金具などの大刀を飾る金具、轡（くつわ）と引き手金具のセットや鞍（くら）金具などの馬具、銅製の芯に銀や金でメッキをした耳環（じかん）と呼ばれる耳飾り、メノウ・ヒスイ・水晶製などの勾玉（まがたま）、碧玉製などの管玉、ガラス製の小玉があり、須恵器などの土器類もまとまって出土しました。

中でも、大刀を飾る縁金具や鞘尻金具は、地金に溝を彫り込んで銀糸をはめ込む「象嵌（ぞうがん）」という技法によって文様が描かれたことが、後の保存処理の際に分かりました。いずれも半円状の文様が主体で、鞘尻金具では魚のうろこ状に見えるよう半円文が配置されていました。銀象嵌（がん）を施す古墳時代の鉄製品が発掘調査で出土したのは県内初のことです。

このように、副葬品の豊富さや石室の規模などから、この古墳の被葬者は、同じ町内にある後井1号墳に次ぐランクの豪族とその近親者の墓ではなかったかと考えられます。これまで知られていなかった古墳が、遺跡地図上に新たに書き加えられたことは、地域の歴史を理解する上で、うれしい誤算といえるでしょう。

大刀を飾る金具（センターで8月31日まで展示中）

岡田裕之（県埋蔵文化財センター調査第2課）

▼次回は8月2日です。

山口県立山口博物館
ＴＥＬ083－922－0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。
最新情報はホームページで